

熱中症は 予防が大事!



令和3年の状況
(5月末現在)
救急出動件数 65件
火災件数 0件

119
消防署より
■お問い合わせ
下川消防署 ☎・☆4-2119

令和2年6月から9月までに熱中症で救急搬送された人は全国で累計64,869人でした。年齢区分別では、高齢者(65歳以上)が最も多く57.9%、次いで成人(18歳以上65歳未満)33.5%、少年(7歳以上18歳未満)8.1%、乳幼児(生後28日以上7歳未満)0.5%の順となっており、発生場所はいずれも住居が最も多く屋外に限らず、屋内での対策も必要です。

下川町でも、真夏日(最高気温が30℃以上)を記録することも珍しいことではありません。そこで、日頃から行える熱中症対策や症状について確認しましょう。

1 熱中症とは

室温や気温が高い中で、体内の水分や塩分(ナトリウム)などのバランスが崩れ、体温調節機能が働かなくなり、体温上昇、めまい、こむら返り、ひどいときには、けいれんや意識の異常など、様々な障害をおこす症状のことです。

ちなみに日射病とは、炎天下でスポーツなどをして、汗をかき過ぎてしまい、体内の水分量が減って脱水状態になることで、フラフラしたらすぐに水を飲むと症状が軽減することがほとんどです。

熱射病とは、汗をかいて体の熱を十分に発散できず、熱が体にこもってしまい、高い体温に体が対処しきれなくなり危険な状態です。そうなる前に水分や塩分は忘れず補給しましょう。

2 熱中症の症状

程度	症状	応急処置など
I度 (軽症)	めまい・失神、こむら返り 大量の汗、筋肉痛	涼しいところへ移動させる。 水分や塩分を与える。
II度 (中等症)	頭痛、嘔吐、身体がだるい 力が入らない、身体がぐったりする (熱疲労)	安静にし、脇や膝の裏に冷却パックを置く。 水などを自力で飲めない場合は病院に行かなくてはなりません。
III度 (重症)	意識がなくなる、歩けない、痙攣 高体温(熱射病)	病院の受診が必須となります。救急車を要請してください。

表内のII度以上で、自分の力では水分や塩分を摂取できなくなっている時は、ためらわず救急車を呼びましょう。熱中症は放っておくと命に関わる恐ろしい病気です。

また、汗をたくさんかいている間は体温がおおよそ37℃~38℃くらいですが、汗が止まると急に体温が上がり始め、40℃を超えるようになり大変危険ですので、早いうちに熱中症かも…という認識を持つようにしましょう。

3 熱中症対策と予防

熱中症は予防することが大切であり、日常生活では、次に掲げるポイントに注意して熱中症にならないように対策をしましょう。

- ①室温が28℃を超えないように、エアコンや扇風機などを適切に使い、カーテン等で直射日光を防ぎ、暑さを避けましょう。
- ②のどが渇いていなくても、暑いときはこまめに水分や塩分を補給しましょう。なお、アルコールは尿の量を増やし体内の水分を排出してしまうので水分補給はできません。
- ③日頃から規則正しく食事を摂り、体力づくりをしましょう。

4 屋内での過ごし方

屋内でも熱中症は起こります。子どもや高齢者、療養中の人がいる家庭では、屋内での熱中症にも注意が必要ですので適切にエアコンや扇風機などを使用してください。

子どもは、体温調節機能が十分に発達していないため、身体内部の体温が上昇し、熱中症を起こしやすくなります。

高齢者は、体温調節機能の低下や暑さに対する抵抗力も弱くなってしまい、水分不足になりやすいのでこまめに水分補給をしましょう。

5 マスクの着用

現在、新型コロナウイルス感染症の影響によりマスクをする機会が増えてきています。マスクをすることにより熱中症のリスクも高まってしまうため、人と対面せずに距離を保つことが出来る場合はマスクを適宜外すなど考慮し、着用の際には十分に気をつけましょう。